桜満開の宇和島城前で

歴史研修（その10）

2019年3月28日㈭～29日㈮

財団のあゆみ120

伊予の城めぐり

今回の歴史研修では、農作物や水産物に恵まれ、古くから豊かな地として栄えてきた愛媛県伊予地方を探訪。桜咲く中、日本100名城に数えられる松山城などを巡り、春の訪れを感じながら学びを深めました。

解説

静岡大学名誉教授

小和田　哲男さん

松山城

初めに訪れたのは、日本に12ある※現存天守の一つを有する松山城です。この地には元々「松前城（あるいは正木城）」と呼ばれる城が築かれていましたが、城主の加藤嘉明が関ヶ原の戦いにおいて東軍で戦った戦功により、20万石の大名に出世。これを機に慶長5年、新たに松山城を同地に築城するとともに、地名を「松山」と名付けたとされています。

松山城は、下見板張りを採用した「黒い城」です。黄金趣味を持つ豊臣秀吉は「金箔瓦を一層映えさせる」として黒い城を好みましたが、その気質が秀吉の下で育った加藤嘉明にも受け継がれていたため、松山城を「黒い城」として築いたのです。

青空と黒い城・松山城のコントラストが美しい

※現存天守とは…江戸時代またはそれ以前に築かれ、現在まで保存されている天守のこと。

松山城の石垣。奥に見えるのは「乾櫓」

松山城の天守から、本丸と松山市街を望む

「連立式天守」と厳重な防衛態勢

松山城の特徴は、大天守や小天守など4つの天守・櫓を渡り廊下でつないだ「連立式天守」という複雑な構造で築かれていること。他にも丸亀城に次ぐ四国で2番目に高い石垣や230mにおよぶ国内最大規模の登り石垣が築かれたほか、死角には隠し門が設けられるなど、さまざまな戦を経験した加藤嘉明のもとで厳重な防衛態勢が敷かれています。

湯築城

次に一行が訪れたのは、松山市の湯築城。古代から聖徳太子や天皇が湯治に訪れたことで知られる道後温泉のすぐ南側に位置しており、平安時代末期の源平争乱以前から約400年に渡って伊予国を治めた河野氏が根城としたとされています。

天文年間（1535～1555年）に築城された湯築城は、基底幅約20m・高さ約5mという大掛かりな土塁に加え、内堀と外堀の間に家臣の居住区を設けるなど、当時としては他に類を見ない珍しい形態の城郭が築かれました。

また、発掘調査の結果、湯築城跡からは他の地域や外国から運

出土した遺物から当時の暮らしぶりが想像される

ばれてきたと思われる遺物が多数出土。水田も多く海産物も豊富に獲れた伊予国の豊かさをうかがい知ることができます。

湯築城の説明を聴く参加者

宇和島城

2日目に訪れた宇和島城は、加藤清正と並ぶ名築城家として名高い藤堂高虎が築きました。

宇和島城も現存天守の一つとして当時の姿が今も残されている

宇和島城を空から見ると、城郭が五角形で作られていることが分かります。四角形の城郭が一般的だったこの時代、五角形の城郭は非常に珍しく、曲がり角が多いことで攻め込んできた敵を撹乱させる狙いがあったそうです。

また、海からの侵入を困難にさせるため、宇和島城はあえて急峻で複雑な地形のリアス式海岸沿いに築かれました。こうした工夫からも、名築城家・藤堂高虎のしたたかさを垣間見ることができます。

宇和島城からの眺め。遠くに宇和海が見える

幕末に作られ現在まで保存されている宇和島城の天守模型

宇和島城と伊達家

藤堂高虎は、宇和島城の完成後ほどなくして今治に移ります。その後、慶長19年に仙台藩主・伊達政宗の長男である伊達秀宗が宇和島城に入城しました。秀宗は、側室の子であることから仙台藩を継ぐことができず、この地に入封したともいわれており、以降この地は伊予伊達家が治めることになります。

大洲城

最後に訪れたのが、復元天守として有名な大洲城です。

明治6年に政府が発した「廃城令」によって、全国各地の城の多くが取り壊されてしまいました。その後、昭和や平成を迎え、全国各地で城を復元しようという機運が高まります。しかし、建築基準法の制約から大部分の城は鉄筋コンクリート造での復元となり、また、資料不足のため推定で復元するほかなく正確性が疑問視される例も少なくありませんでした。

そんななか大洲城は、明治時代に撮影された写真や内部構造に関する資料が豊富に残されており、また地元・大洲市からの理解や支援が寄せられたことが大きな後押しとなり、当時の工法を用いた木造復元によって、ほぼ正確な姿で天守を蘇らせることができたのです。

ちなみに大洲城も藤堂高虎によって築城・整備されました。自然の地形を巧みに生かす藤堂高虎らしく、一級河川「肱川」の流れを利用して城郭を整えたとされています。

満開の桜と大洲城

一行はその後、肱川随一の景勝地・臥龍淵を臨む「臥龍山荘」を訪れ、帰途に着きました。今回の歴史研修は、桜咲き誇る伊予の風景を楽しみながら、今も現存する天守をはじめ戦国の世を知る貴重な資料に触れ、大名たちの軌跡に思いを馳せる2日間となりました。

天守から望む肱川の流れ

趣ある佇まいの臥龍山荘・不老庵